

総合的な学習の時間としての 出前授業

読売新聞東京本社科学部 小川 祐二 朗

「環境問題をテーマに1年間、NIE (Newspaper in Education = 教育に新聞を) 紙面を作りたい。取材は国内外どこに行っても構わない。中身は君に任せるから頼むよ」

筆者は、新聞社の科学部という部署で環境問題を担当し、地球温暖化や生物多様性といった問題を科学の視点から報道している。だから、こんな注文が舞い込んでくるのだが、話が持ち上がるまでは正直、NIEのことは真剣には考えたことがなかった。

「海外取材も可」という甘言に飛びつき、承諾したものの、はてさてどうしよう。

NIEというからには、子どもが興味を持つ話題でなければならない。しかも、教科書には載っていないテーマで、「なぜ?」という疑問を子どもたちから引き出し、考えさせるものでないといけない。

逆にいえば、これらの条件をクリアすれば、どんな紙面展開もありうる。一方で、これといった正解があるわけでもない。後から気づくのだが、こうした一連の作業こそまさに「総合的な学習の時間」(以下、総合学習という)が目的とする能力が試されていた。社会人に不可欠な資質そのもの、といっても良い。

文部科学省によると、総合学習の目的は、課題を子ども自らが見つけ、考え、解決する資質や能力を育てることだという。後述するように、文科省は2007年になって、総合学習の時間数を減らす方針を打ち出すのだが、日ごろの取材活動で若い記者たちがなかなか自分から動かない(動けない)現状を痛感している者としては、

総合学習の理念は共感できるものだった。

「わたしたちは豊かですか?」

いろいろ考えた末、取材先に選んだのは、南米チリ沖に浮かぶイースター島、エクアドル沖のガラパゴス諸島、米フロリダ州の湿原エバングレーズの3か所だった。

巨大石像モアイで有名なイースター島は、この石像を誰が建てたかをめぐって世界七不思議のひとつにも数えられる。18世紀初頭のイースター(復活祭)の日に上陸したオランダ人以来、訪問者たちには島民の貧しい暮らしと、高度な巨石文明がどうしても結びつかなかったからだ。

いったい、何が起きたのか?

荒波を越えてポリネシア系の人々が島に入植したのは、5世紀以降。それ以前の島は森林に覆われていたことが、植物の花粉分析で分かっている。入植以降、人口が急増した島では農地が必要になり、島民は森を切り開いた。入植時に偶然持ち込まれたネズミが大繁殖し、木々の種子を食べ尽くしたことも森林の消滅に拍車をかけた。

繁栄とともに島民たちはモアイ作りに熱中するが、森林が完全消滅したことで、土砂が流出してタロイモやバナナなどの農作物は育たなくなった。漁業用の丸太船も作れなくなった。それは同時に飢餓の島から脱出できなくなったことを意味した。16世紀後半からは部族間で石像を引き倒す「モアイ倒し戦争」が始まり、互いが互いの肉を食べるカニバリズムが常態化することになる。

イースター島とは別の形で、人間活動の影響が現在進行形で起きているのが、ガラパゴス諸島だ。

大陸と一度も接したことがないことから、生物たちが独自の進化をとげたガラパゴス諸島は、世界自然遺産の最初の登録地となった。しかし、世界遺産というビッグ・ネームゆえに、大量の観光客を呼び込むようになり、それを目当てにした新島民が急増。日本には動物たちの楽園として伝えられる島で、ゴミ問題やアジア向けのエビやナマコの乱獲も起きるようになり、2007年6月には世界遺産の危機リスト入りしてしまった。

一方、米国有数の大湿原エバークレーズでは今、約1兆円の税金と30年もの年月をかけて、かつての風景を取り戻す自然再生事業が進んでいる。これまで、湿原は無用として埋め立てが進み、農地や住宅地に姿を変えた。広大な敷地で知られるディズニーワールドも沼地を埋め立てて造成された。その結果、湿原にすむフロリダパンサーやマナティ、水鳥などが絶滅の危機に瀕していたからだ。

これらの問題の紙面化に際して訴えたかったのは、大量生産・大量消費・大量廃棄の上になりつつ現代文明では早晚、限界が訪れるということだった。この問題は我々の世代より、次の世代でより先鋭化するだろうし、それを元に戻すには膨大な予算と労力が必要になることも伝えたかった。

NIE紙面では、子どもに人気の外国産カブトムシなどの外来種問題や地球温暖化など、ほかのテーマも取り上げた。私たちが口にしていない食料は生きものを殺生したものであることに気づいてもらうため、ニワトリを自ら解体して食べる子ども向けの体験キャンプの様子を伝えたりも、反響が大きかった。

いくつもある答え

こうしてNIEを担当した縁で、小中高校や大

学などに“出前授業”講師として派遣されることも多くなった。

授業に充てられるのが総合学習の時間で、筆者に与えられた役割は、NIE紙面と同様、学校の先生とは違った「視点」を教室に持ち込むことだと考えた。授業では取材した実体験を写真やグラフとともに紹介するが、環境問題は魔法のような解決策がない矛盾だらけの問題であることも伝えた。

「自然が豊かな土地では、人々の暮らしは物質的には豊かではない」「そういう人々に自然が大事だから、開発はするなと誰がいえるか」「地球温暖化を止めるには、便利な生活を我慢しなくてはならない」

「さあ、みんなならどうする?」。こう問いかけると、子どもたちは困った表情になるが、「節電をする」「貧しい国にもっと援助する」という答えもぽつぽつ出てくる。

社会に出ればむしろ、こういった答えが出ない問題に遭遇することが多い。「そこが答えが決まっている学校の勉強とは違うところで、そのたびに考え抜けば良いんだよ」というと、子どもたちの表情もようやく和らいだ。

総合学習は「ゆとり教育」という文脈の中で、2002年に完全実施されたが、「基礎学力低下」の大合唱でたった5年程度で縮小が決まった。総合学習にはマニュアルが通用しづらいし、子どもたちの学習評価も教科と違って難しそうだ。先生方もさぞかし苦労されたのだろう。しかし、総合学習とゆとり教育は本来、別次元の話ではないか。

私たち社会人は毎日、夏休みの自由課題に取り組んでいるようなもの。間違っても良いから、自分なりの答えを出す…。それは、外国で道に迷った時、就職活動で内定が出ない時、会社で大きなプロジェクトを任された時に、発揮されるべき「社会科」(総合学習)の成果だと考えるが、どうだろう。